

論題	木版画摺師 正文堂の仕事
著者	桑山童奈
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第36号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2010年(平成22年)3月
判型	A4(210mm × 297mm)

【資料紹介】

木版画摺師 正文堂の仕事

桑山 童奈

はじめに

当館は平成十八年、木版画摺師業を営んでいた一家から資料を譲り受けた。「正文堂」は横浜市南区浦舟町で故佐藤正夫氏とその一家によつて営まれた摺師業の屋号である。

頂いたものは摺り上げた懸紙、マッチラベル、団扇絵、クリスマスカード、千社札などの紙製品にそれらを貼り込んだ見本帳、使用された版木と、刷毛、馬連、乳鉢などの道具類である。これらからは、日常生活で使用されていた紙製品を生産する木版画摺師業の末期の様相と、横浜という土地ならではの特色を見いだせる。

このような資料の寄贈を受けるにあたって、寄贈者である正夫氏の子息の佐藤四郎氏と律三氏に伺った話から「正文堂」の仕事を概観する。

一、「正文堂」とは

錦絵の彫と摺の仕事についてあらわした石井研堂によれば、摺師とは

一枚の馬連を懐中にして飛び出せば、何処へ往つても、食ふに困らないといふ、腕一本の職業である、それに、氣立てが、江戸ツ子風に出来て居て、貯蓄でも作れば、人間の出来損ねのように思つて居る社会である^①

【キーワード】 木版画 摺師 昭和

【要旨】

当館は平成十八年（二〇〇六）に、正文堂^{しょうぶんどう}という屋号で木版画摺師業を横浜市内で昭和期に営んでいた一家から資料を受け入れた。資料には納品されなかった製品、版木、道具類があった。製品にはお菓子などの懸紙、クリスマスカード、マッチラベル、団扇絵など日常生活に必要とされたものが多い。また、仕事を請け負っていた先には横浜市内の商店が多く、その製品は横浜にあった商店の歴史を語るものでもある。正文堂の資料は、それほど遠くない過去の日常生活の場に必要とされた木版画製品生産の終焉期を雄弁に語る貴重なものである。未だ資料整理の途中ではあるが、現在までに調査したことから正文堂の仕事の概要を紹介する。

という。また、後でふれる摺師高木省治氏が回顧する職人の姿も同様である。両者の記述からは、腕自慢の職人氣質の男が馬連を手に渡り歩く姿が目につかぶようである。しかし、横浜に根をおろした正文堂の仕事には、横浜ゆかりのものが多く見いだせる。

正文堂は佐藤正夫氏（明治三十四年・一九〇一～昭和五十七年・一九八二）、長男律三氏（昭和三年・一九二八～）および三男委氏^{（トモ）}が横浜市南区浦舟町で営んでいた木版印刷業である。律三氏の高齢化により約二十年前に廃業した。

まず、正文堂の概略について、伺ったお話と正夫氏が取材を受けた『市民グラフ ヨコハマ』の記事を参考に紹介する。

佐藤正夫氏は明治三十四年に生まれた。元来は「政」夫であったが姓名判断により「正」に改名した。正文堂の屋号はその「政」の字を分解して名付けたものという。なお、『原色浮世絵大百科事典』でまとめられた版元のリスト「浮世絵版画の版元」^{（3）}には、幕末に活動した版元で「正文堂政吉」というものがあるが、四郎氏によればそれとは関連はないという。

正夫氏は十二才の時、横浜で石井廉という摺師の親方の元で修行をはじめた、という。十九才で年季をあげて東京へ出るが、翌年から九年間は京都で仕事をし、その後、横浜に戻ってきたという。横浜での正確な開業年月は不明であるが、資料のなかには、明らかに第二次世界大戦期のものとかかるものはいくつかある。なお、横浜は昭和二十年（一九四五）五月二十九日に空襲を受け、浦舟町に近い真金町も被害が大きかったが、正文堂のある浦舟町の一角は被災を免れている。

また、横浜市中心図書館が所蔵する横浜市内の電話帳を調べたところ昭和十四年（一九三九）のものから「佐藤正文堂」の名で登録が見られる。^{（4）}

絵師と異なり画面上にその名が残ることの殆どない、彫師と摺師という木版画職人の動向について、知ることができる資料は少ない。その一つに長谷鎌平氏が江戸以降、特に昭和七年（一九三二）ころを頂点として、東京と横浜、静岡など近県で仕事をした彫師と摺師職人を詳細に調査してまとめた「関東彫師、摺師名録及び諸派系図」^{（5）}がある。この資料は人名を姓の五十音順に並べた「一覧」と「系譜」の二つから構成される。この「系譜」に石井廉氏、正夫氏、律三氏、三男の委氏の名前は、「浜人系」という流れに属すると紹介されている。残念ながらこの「系譜」の表記には理解しがたいところがあり、正夫氏の師は石井廉氏なのか、塩田米吉氏なのか判断しがたいため、「系譜」の紹介は控える。

この資料には職人の名前だけでなく、徒名や没年、師、居住地、年齢も記載されている。年齢は刊行当時を基準としたらしく、正夫氏、律三氏、委氏はそれぞれ六十二、三十四、二十七才と記されている。この系図によれば「浜人系」は横浜住人である某を祖とする流れであり、「浜人」という言葉も横浜を中心として広がったことを連想させる。長谷氏はのちの昭和四十一年（一九六六）に『伝統木版画技芸者故名录』^{（6）}も公刊している。しかし、こちらには師の石井廉氏は紹介されるものの、正文堂一家は取り上げられていない。

また、昭和の木版画業界を知ることができるもう一つの資料に、摺

師で東京木版画工芸組合相談役であった高木省治氏が、摺師を中心に昭和初期に活動した木版画関連の人々を記録した「昭和初期の木版摺業界」があり、こちらにも正夫氏の名が記されている。この中の系図では石井廉氏からはじまる静岡系に、石井の弟子として正夫氏ほか二名の名があげられている(図版1)。正夫氏のことどもたちは記載がない。

そして、人物を一人ずつ紹介する項には正夫氏の項目は挙げられていないが、石井廉氏の弟子として同様に系図に名がある「大村石之助」の項の最後に、「同門に横浜の佐藤正夫がいる。」と記されているのが正夫氏のことを指すものと思われる。⁸⁾ただし、こちらの項では「大村石之助」は「海岸系(横浜の意)」の人物として紹介され、統一がとれていない。

この二つの摺師系図を石井廉氏中心に照合すると、前述の長谷氏の系譜には大きく「浜人系」とありその下に「石山(井の誤植であると思われる)」「浜兼」「関山」の連なりがあるが、高木氏の回顧では「浜兼系」「静岡系」「浜人系」と独立した三つの流れで、石井廉氏は「静岡系」と紹介される。また、高木氏の「浜人系」の元である「大木金五郎」の名は、長谷氏の「関東彫師、摺師名録及び諸派系図」の「浜人系」には見られないなど、両者の情報整理にはかみ合わない点がある。また、それぞれの原稿の中にも記述の齟齬が見られる。長谷氏、高木氏の稿はともに、公式な文書などない状況下において各人の記憶を元に作られたもので、遺漏や認識の違いもあるものと考えたい。

広く公刊されたものではないが、佐藤家には昭和五十六年(一九八二)四月に発行された「東京木版画工芸組合員名簿 附規約」

が残されていた。そこには彫師や摺師など関係者の氏名、住所が記載されるが、もちろん律三氏の名が見える。ちなみにこの名簿には神奈川県在住者は律三氏のほかに唯一人である。昭和三十七年(一九六二)に刊行された長谷氏の記事では神奈川県内に数人の摺師が活動している。この間に職人たちの高齢化、後継者なし、廃業という状況が進んだと思われる。

最後に、正夫氏、律三氏について特筆すべきことを紹介する。父、正夫氏は昭和五十年(一九七五)に専門技術をもって産業経済の発展に寄与したと横浜市から表彰され、翌五十一年は東京木版画工芸組合から業界の発展に尽力したこと、喜寿を迎えたことを顕彰されている。

律三氏も伝統的な木版画の技術者として新聞に取材されたことがある。佐藤家に残されていた朝日新聞横浜東部版「横浜有情」というコラムは、日付の部分が失われているが律三氏の年齢(五十一才)から判断して、おそらく昭和五十四、五年(一九七〇、七一)の一月のものである。連載の第二回目で「浮世絵」と題されたこの記事では、父正夫氏は「一線から退き」、律三氏は挿絵画家として知られた志村立美氏(明治四十年・一九〇七〜昭和五十五年・一九八〇)の美人画の摺を請け負っていると紹介される。

さらに昭和六十一年(一九八六)五月十四日に、律三氏は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館における春の演劇講座で「浮世絵木版―伝統の刷」という演題で摺りの実演を行った。⁹⁾同館『館報』の事前告知記事では、「現代作家の木版も手がけられている方」と紹介されている。

二、正文堂の仕事

前述したように石井廉という親方について横浜で修行をはじめた正夫氏は、十九才で年季をあげて東京へ出るが、翌年から九年間は京都で仕事をし、その後横浜へ戻ってきたという。長年にわたるその仕事には、横浜という土地柄を示すものが見いだせる。

正文堂が仕事をしていた横浜市南区浦舟町（図版2）は、関内駅から直線距離で約二キロメートル弱のところであり、横浜橋商店街や伊勢佐木町の商店街（イセザキモール）という大きな商店街に近く近い。また関内駅や、桜木町駅が最寄りの野毛地域の飲食店街にも近い。つまり、横浜の中心地に近い地域で営業していた。

この南区は現在の横浜市内でも繊維、小規模経営の印刷業が多い地域であるという。携わる人が多い理由は、繊維産業では輸出用やお土産用に人気のスカーフなどの捺染に大岡川の水を利用したこと、印刷業では横浜の繁華街に近いために仕事があることがあげられる。ここで注目したいのは、かつて紙製品もスカーフも木版で同じ職人が摺っていた時期があることである。¹¹

絹製品への木版による捺染加工を「木版更紗」といい、昭和初期を全盛期として二十五年（一九五〇）前後に見られなくなるといふ。正文堂もスカーフの摺も行っていた時期がある。佐藤家にはスカーフのための道具類はなかったが、横浜輸出木版更紗同業組合による昭和十四年付けの賃上げ要求の書類（図版3）が残されていた。この組合の代表として、正夫氏の師であった石井廉氏の名がみえる。この組合

については調べていないが、この書類が残っていたことは、正文堂のスカーフ捺染業への関与を証するであろう。

正文堂が紙製品でだけではなく捺染も行っていたことは、前出の高木省治氏による懐古とも一致する。

昔から木版摺業界ではニツパチと言って、二月と八月は比較的仕事（マツ）の少ない月で、手のあいている摺師は京都や横浜へ出稼に行ったものです。京都の仕事は二月頃から扇面地紙の摺があり、大体祇園祭の頃には終るものでした。横浜の場合は、輸出用ハンカチーフを木版摺でやって居りましたが、絹地に紙で裏打ちをしたものを摺るの（マツ）で針金バレンを使いました。そのため体力のない者にはむかない、ほねのおれる仕事と聞かされておりました。¹²

また、註11にもあげた『横浜スカーフ 木版更紗から現代まで』は、昭和二十年（一九四五）当時に横浜市内に木版摺師が三十〜四十人、彫師も七〜八人いて、多くはハンカチ（スカーフと同義）をつくる人であった、という律三氏の記憶を伝えている。正文堂がスカーフなど絹織物の摺を行っていたことは、横浜、それも浦舟町という横浜の中心に隣接している土地のかつての印刷業のありさまを物語っている。さて、その大部分であった紙製品の仕事にはどんなものがあつたの（マツ）であろうか。

図版4は正文堂の宣伝用の団扇絵である。そこには営業品目として「浮世絵、Xマスカード、高級ペーパー、掛紙、案内状、他木版摺一式」

「古代錦絵」「現代版画」とあげられている。この中で「高級ペーパー」が具体的に何を示すかは不明であるが、資料には、このほかにマッチラベル、団扇絵、千社札が残っている。

この宣伝文句と残っている資料、伺った話から判断すると、正文堂の仕事の仕方には大きく分けて二種があったようである。正文堂が請け負い、生産全体をとりまとめて納品するものと、摺のみを請け負うものである。見本、製品の余り、版木が残っているものは正文堂が受注し、納品する製品であると思われる。版木の製作は彫師に依頼していた。また、懸紙などの絵を正夫氏が描いたこともあるという。版木などは残っていないが、家族の記憶にある仕事は、摺の委託だけうけたものではないかと想像できる。資料が残っておらず詳しいことはわからないが、他の資本による浮世絵版画の復刻版作成や現代版画のために仕事を依頼されることもあった。前項で律三氏が志村立美氏の版画の摺をしているという新聞記事を紹介したが、それは悠々洞（東京）という資本の仕事であり、同社からは浮世絵版画の復刻版も請け負ったことがある。

先に、摺の職人は仕事を求めて移動するものであった、という石井研堂氏の記述を引用したが、根を下ろした正文堂は渡り歩く職人も受け入れる立場であったようだ。

この宣伝団扇絵にある電話番号は、横浜市内の電話帳と照合したところ昭和三十三年（一九五七）頃に正文堂で使用していたものである。また、他の製品に見られる商標でも市内局番が一桁のものが大部分である。浦舟町は昭和三十五年（一九六〇）頃に市内局番が二桁となり、

横浜市内の市内局番がすべて三桁となるのは昭和四十二年（一九六七）八月からであるので、仕事の多くはそれまでのものと思われる。

正文堂が全てを請け負った紙製品、すなわちクリスマスカード、商店の懸紙やマッチラベル、団扇絵、扇面、千社札、缶詰のラベルなどは、おもに日常生活の場で必要とされるものである。これらの中でクリスマスカードの生産も横浜という土地柄を示す。なぜなら四郎氏のお話では、クリスマスカードは第二次大戦後、横浜に多くやってきた進駐軍の軍人を相手にしていたからである。絵柄はさまざまなものがあるが、浮世絵版画を模倣したものもある。図版5は、カードの見本帳で、図版6はその中に貼り込まれた風景画のカードである。浮世絵版画の様式を模倣し、「広重」という署名も見える。このようなクリスマスカードをもらって、はじめて浮世絵の世界に触れる外国人もいたのではないだろうか。

三、版木からわかるその仕事

私は浮世絵版画について勉強をしてきたが、木版画の版木を手に取り、眺めたのはこの正文堂のものがはじめてであった。彫は意外に浅いものであった。多くの版木は両面ともに使用されており、画面のごく一部分にしか使用されない色は、一枚で二色分彫られているものもある。ひと組の版木の数が多いものはクリスマスカードなど「絵」の要素が強いものである。浮世絵版画を模倣したようなカードでは、墨の色だけでも濃淡を違えた複数の版木があり、微妙な色遣いを表現する。版木の少ないものでは、懸紙が二〜三枚程度、纏番団扇と呼ばれ

る纏を描いた団扇絵は纏の墨色ともう一色程度で、両面あるいは二枚程度である。マッチラベルも版木の枚数は少ないが、ひと組の版木で複数枚摺れるようになったものがある。

本稿では横浜および神奈川県内の商店に関する貴重な資料ともいえる懸紙の版木と摺を中心に紹介する。

懸紙用の版木には、紙の大きさにあわせた絵柄だけのもののほかに、文字のみの小さな版木が大量にあった。小さな版木は一、贈答の目的の言葉（「御歳暮」「御中元」）、二、内容物を示す文字（「御菓子」「鯉節」など）、三、商標（店名・住所・電話番号）をあらわし、絵柄の版木を組み合わせて摺ること、一枚の懸紙ができあがる。図版7は「寿」の文字の小版木である。「寿」一つとっても、さまざまな書体のものがある。

したがって、客は絵柄と商品名などを見本から選び、自店の商標を加える、という注文方法が多かったようだ。そのため、製品を見ると、同じ絵柄であっても、違う商標の入っている物が見受けられた。色とりどりの懸紙には、四季折々の花鳥や各節句の祝い事、祝儀、不祝儀の柄など、多様な絵柄が摺られている。これらは日本人の日常生活のさまざまな局面を彩ったに違いない。

図版8は、懸紙を摺るための版木を固定する器具である。台はベニヤで、見当にあたる部分のいくつかは、何かの空き箱であるボール紙であるように、非常に簡便につくられているが、それぞれの版木を固定してできるように工夫されている。ここでは松葉の絵と「御赤飯」の小版木が固定されている。労力を節約するための経験から生まれた

道具であろう。

一方で、自店独自の懸紙をデザインして、注文した商店もいくつかある。図版9は大正二年（一九一三）創業で現在も中区伊勢佐木町に続く菓子店「浜志まん」の「志ほ里」で、菓子の箱にしのばせたものと思われる。上部に横浜の港を置き、右下にある自店舗から左下にある伊勢山皇大神宮と掃部山、中央に波止場、右上に三溪園、今はない杉田の梅林など横浜の観光名所を見渡すように描かれている。また右には、「ハマ」の字をあしらった横浜の徽章を利用した同店の商標があり、横浜の商店であるという意識を強く感じさせる。ほかにも浜志まんには独自のデザインの懸紙がある。これらは消耗品ゆえに、注文した商店にも今は残っていないものが多いと思われる。

このような商標の小さな版木は引き出しや箱にぎっしりと詰め込まれていた。全ての整理が終わったわけではないが、正文堂が横浜を中心に神奈川県内の商店の仕事をしていたことがわかる。なかでも菓子店のものが多く、これらの版木も神奈川の産業の一側面を語る。

神奈川県には「神奈川県指定銘菓」という制度¹⁵がある。菓子業界の発展と観光産業の振興に寄与することを目的に創設されたものである。昭和二十五年第一回指定が行われて以降、平成二十年（二〇〇八）に二十六回を数えている。約二年に一度コンクールを行い、優秀な成績をおさめて指定を受ける資格を得た業者が指定を申請し、県知事が指定するというシステムである。図版10は昭和二十五年の第一回指定を受けた「千代田の栗最中」（現南千代田栗最中本舗 横浜市西区）の懸紙で、「神奈川県指定銘菓」の文字が朱で鮮やかに摺られている。

この「神奈川県指定銘菓」という文字だけの版木も複数あった。ここで詳細は記さないが、ほかにも指定された菓子店の商品名や商店名が小版木群に数多く含まれている。正文堂の版木や懸紙は神奈川県指定銘菓制度を語ることができる、有意義な資料である。

懸紙のほか、マッチラベルには横浜市内の飲食店の名が多く見られる。団扇絵には纏の文様のものが多く、さらに「鳶〇〇」と注文主の名が入っているものもある。詳しく見ていけば、それぞれに地域や時代の特色が見いだせるであろう。そのための整理、調査を進めることが、今後の課題である。

おわりに

以上、正文堂の佐藤正夫氏と律三氏の仕事について、律三氏と四郎氏から伺った話と公刊された資料、そして頂いた紙製品や版木などを概観して、正文堂の仕事のうち、特に横浜、神奈川県に関連することを紹介した。

残されていた資料のうち、大きい版木は殆ど古新聞紙にくるまれていた。それらの日付には幅があるが、多くは昭和三十〜四十年代のものである。つまり、その日付が版木の最終使用日に近いとすると、進物などの懸紙もその頃まで木版画で摺られていたものがあつたのである。印刷された現在のものとは異なり、厚みのある紙に摺られた懸紙には木版画の質感があり、あたたかみを感じられる。私たちは生産効率や安価と引き換えに、身近にあつたこのようなささやかな贅沢を失ってしまったのではないか、と思わせる。

正文堂に残っていた紙製品、版木など、殆どは日常生活のためのものである。現在、木版画といえば江戸期の浮世絵版画が思い浮かび、日本の誇る芸術作品とその技術という印象があるように思う。しかし、かつては日常生活品も当然、木版画で摺られていたのである。それらは消耗品ゆえに失われ、現在残っているものは貴重な存在といえる。今後は資料の整理を進め、昭和の横浜における木版画摺師業についてさらに明らかにしたい。

謝辞

貴重な資料をご寄贈くださいました正文堂の佐藤律三氏、四郎氏にあらためて感謝申し上げます。また、当館の学芸員実習で資料の整理を手伝ってくれた学生のみなさまにも御礼申し上げます。

註

- (1) 石井研堂『錦絵の彫と摺』芸艸堂、平成六年（昭和四年刊初版）、一二四頁。
- (2) 「ハマッコの歌」『市民グラフ ヨコハマ』第五号、昭和四十七年、四十四〜五頁。なお、文中の年齢が満年齢であるか、かぞえどしであるかは不明である。
- (3) 『原色浮世絵大百科事典 第三巻 様式・彫摺・版元』大修館書店、昭和五十七年、一三九頁。
- (4) 『横浜川崎電話番号簿 昭和三十二年六月一日現在』関東電気通信局、昭和三十二年。以下、横浜市内の電話番号については横浜市中央図書館資料課「横浜市中央図書館所蔵横浜市電話帳目録」横浜市中央図書館、平成二十一年、を手がかりに、調査した。
- (5) 鈴木重三編『日本版画美術全集 別巻 日本版画便覧』講談社、昭和

三十七年、七十一～一〇〇頁。

(6) 京都版画院刊。

(7) 上、中、下『浮世絵芸術』六十五、八、七十号、昭和五十五年、六年。なお、この論考の存在については、アダチ版画研究所の松崎未来氏にご教示いただいた。

(8) 前掲註7『昭和初期の木版摺業界』上、二十二頁。

(9) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『館報』五十五号、昭和六十一年四月十日発行。http://herniaenpaku.waseda.ac.jp/kampo/055.pdf

(10) 南区制50周年記念誌編集委員会『南区制50周年記念誌 南・ひと・街・

こころ』南区制50周年記念誌刊行委員会、平成六年、一四七～五〇頁参照。

(11) 以下、スカーフの生産については『横浜スカーフ―木版更紗から現代まで―』横浜市勤労福祉財団、平成元年を参考にした。

(12) 前掲註7『昭和初期の木版摺業界』上、十一頁。

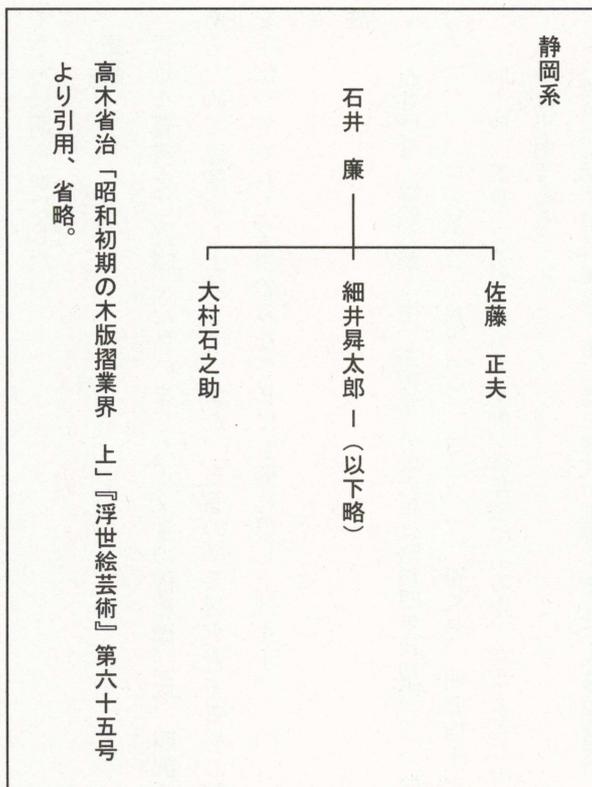
(13) 横浜市中心図書館は昭和三十五年の電話番号簿を所蔵していないが、三十四、三十六年のものから三十五年頃変更になったのではないかと推測できる。三桁化については『横浜市50音別電話番号簿 昭和42年8月20日現在』日本電信電話公社、昭和四十二年、を参照。

(14) 表紙に「中区浦舟町」と所在地が記されているが、浦舟町は昭和十八年（一九四三）に南区が新設されるまで、中区であった。『横浜の町名』横浜市民局総務部住居表示課、平成八年。

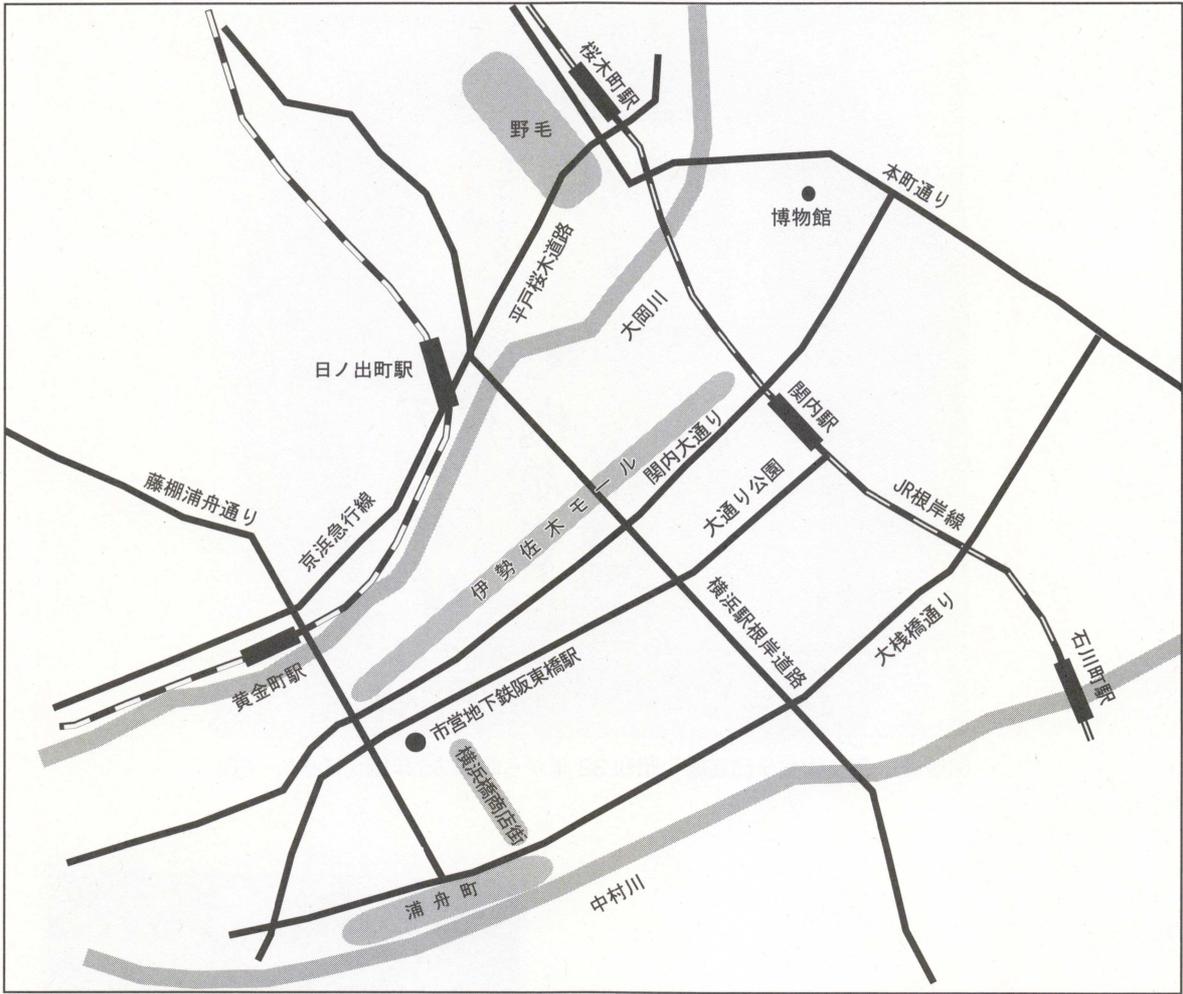
(15) 神奈川県銘菓共励会 http://www.kanagawa-kankou.or.jp/meika/ およ

び神奈川県HP、記者発表資料、平成二十年（二〇〇八）三月十三日。

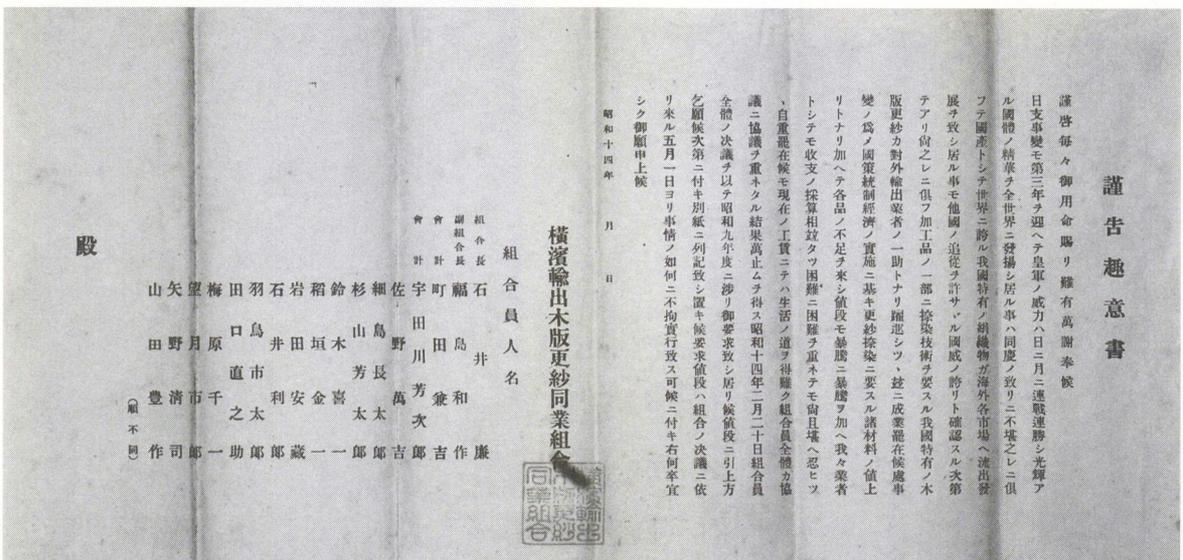
http://www.pref.kanagawa.jp/press/0803/025/index.html



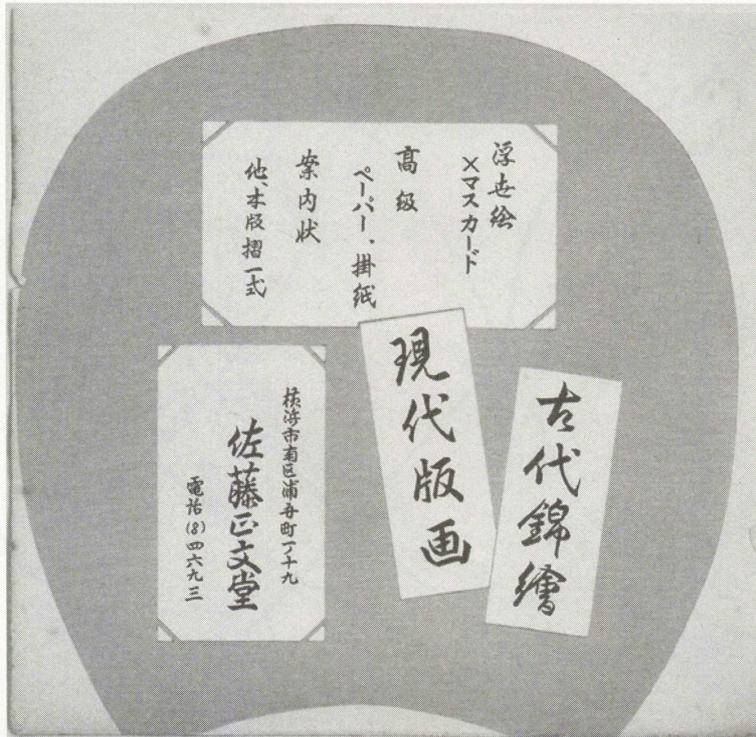
図版1 摺師系譜（石井廉－佐藤正夫関連）



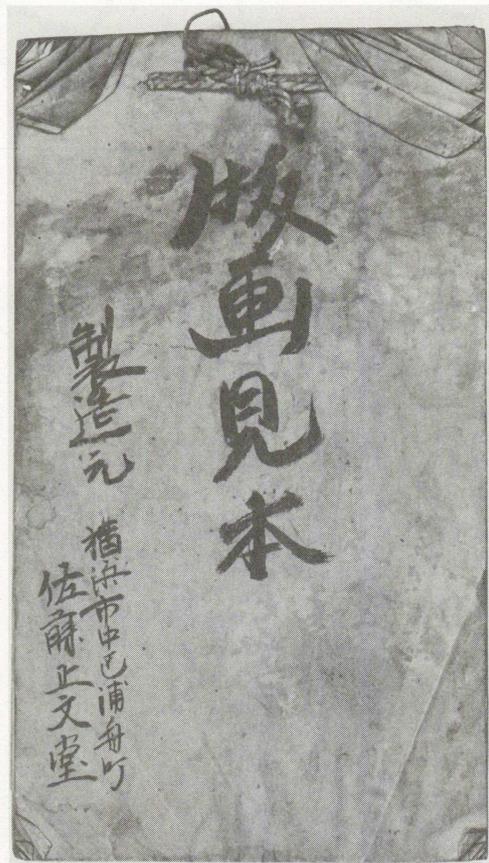
図版2 横浜市南区浦舟町周辺



図版3 謹告趣意書 横浜輸出木版更紗同業組合 昭和14年(1939)



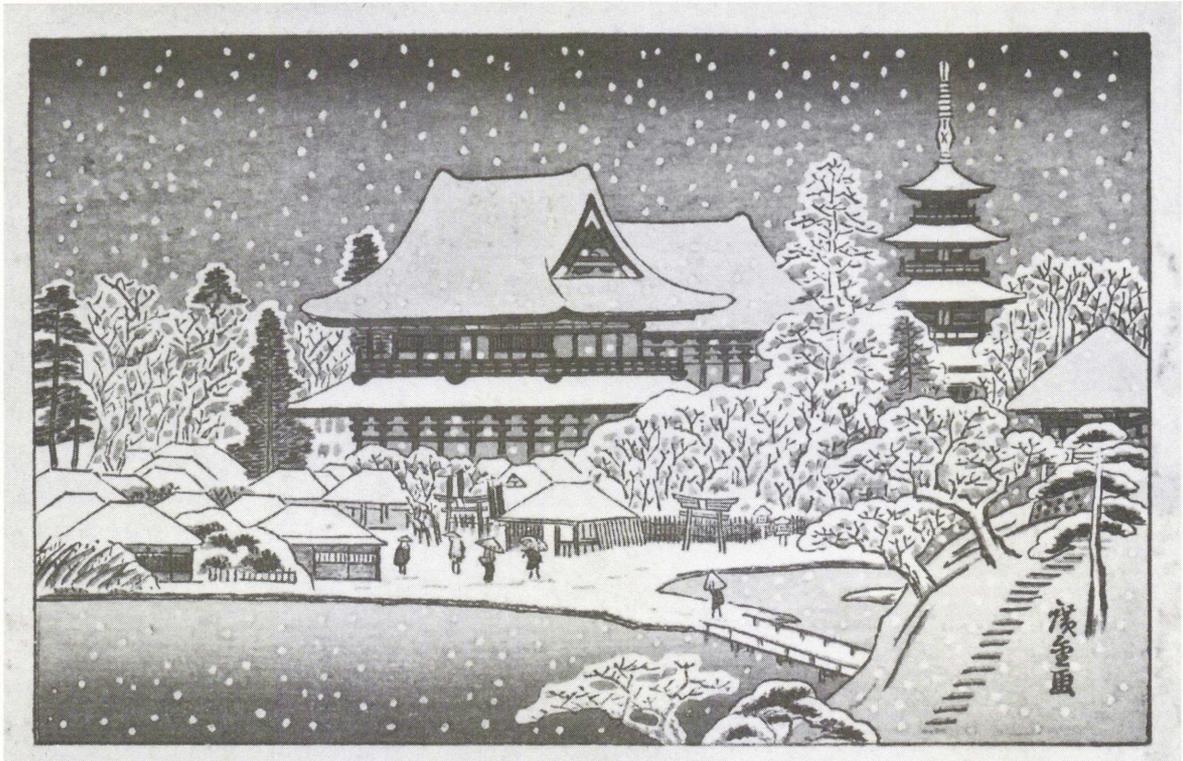
図版4 正文堂宣伝団扇絵 昭和32年から昭和35年頃(1957~60)



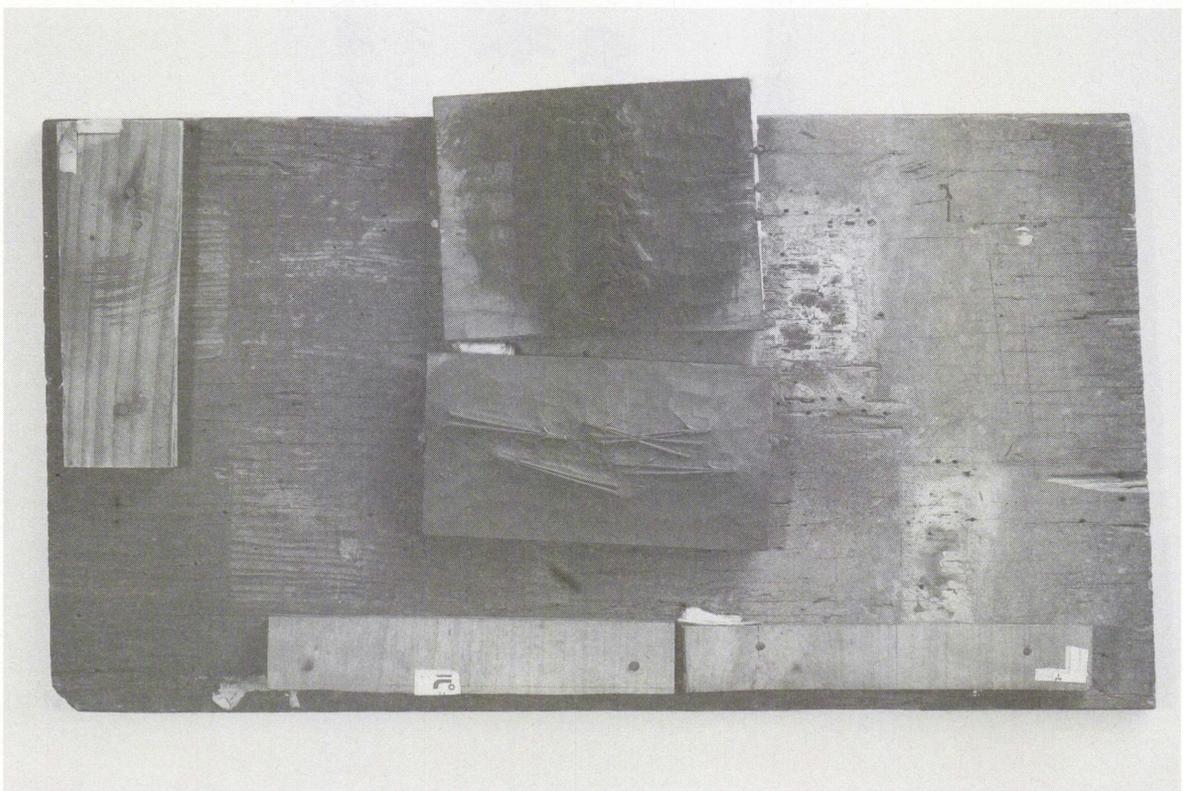
図版5 正文堂版画見本帳



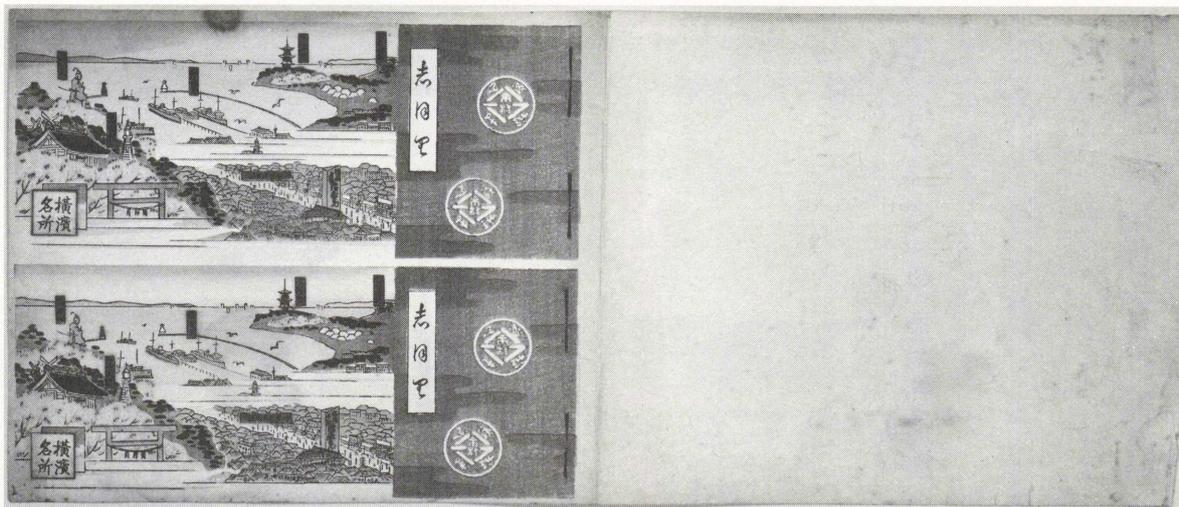
図版7 版木「寿」



図版6 カード見本 正文堂版画見本帳のうち



図版8 懸紙用版木固定台



図版9 「志ほ里」浜志まん



図版10 懸紙 「横浜名物千代田乃栗最中」